

| | |
|-------------|----------------------------------|
| ふりがな 学校名 | ちばけんりついちばらこうとうがっこう 千葉県立市原高等学校 |
|-------------|----------------------------------|

学校の概要

1 学校・地域の特色

「質実剛健・協同親和」を校訓とし、創立 80 周年を迎えた伝統校である。本校のある市原市は、千葉県のほぼ中央に位置し、北部から中部にかけては平坦地が多く、中部で緩やかな丘陵、南部は標高 200 から 300 m の山間地帯で、本校は、この中部に位置する。大化の改新後には、上総国の国府がこの地におかれ、上総国の政治の中心地であった。また江戸時代には、市の中央を縦断する養老川は、川舟による輸送が盛んに行われており、江戸（東京）へ帆かけ舟が活躍し、まちの経済を支えてきた時代もあった。戦後、臨海部の埋め立てが始まり、京葉コンビナート地帯が形成され、日本の高度成長とともに、まちは大きな変貌を遂げた。しかし、南部の丘陵や山間地帯には多くの自然が残され観光地となっており、年間を通して多くの観光客が訪れている。

2 学校の概要(平成 17 年 5 月 1 日現在)

| 課程 | 学科 | 1 年 | | 2 年 | | 3 年 | | 4 年 | | 計 | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| | | 学級数 | 生徒数 | 学級数 | 生徒数 | 学級数 | 生徒数 | 学級数 | 生徒数 | 学級数 | 生徒数 |
| 全日制 | 普通科 | 4 | 160 | 4 | 151 | 5 | 177 | | | 13 | 488 |
| | 英語科 | | | 1 | 15 | 1 | 8 | | | 2 | 23 |
| | 計 | 4 | 160 | 5 | 166 | 6 | 185 | | | 15 | 511 |

研究の内容及び成果等

1 研究主題

(1) 研究主題

郷土「ちば」を愛する心をはぐくむ学習活動の研究

(2) 研究のねらい

上総では男の子が生まれると、その子の

健康と出世を祝って、端午の節句に凧を揚げるという風習があった。このことは現在まで続いてはいるが、その形や絵柄等の意味を知るものは少ない。この凧の制作をとおり、この地域に伝わる文化について考え、郷土にたいする愛着心を高めることをねらいとする。

2 本年度の研究内容及び具体的な取組

(1) 取組の概要

第 2 学年の美術の授業において、地元在住の「匠」との TT の形態で授業を実施。

(2) 指導の実際

地元で伝わる袖凧を各個人で制作。またグループ(7 人程度)制作として袖凧・角凧(約 2 羽)を共同で制作した。



袖凧共同制作の様子



角凧制作の様子

3 成果と課題

成果

- ・郷土に伝わる伝統文化やその歴史を理解し地域に対する関心が高まったこと
- ・生徒が凧の制作をするなかで地域や保護者から多くの協力や助言を得ることができたこと。
- ・生徒の郷土に対する愛着心が高まったこと

課題

- ・伝統的な絵柄をそのまま使い、凧づくりの体験・技術の修得といった面が強かった。生徒自身が伝統文化を生かしつつ考え工夫し制作できるような教材の開発が求められる。

| 教科等 | 美術 | 学年 | 第2学年 | 単元名 | 地域における伝統文化を考える。 |
|--|--|---------------------------|------|---|-----------------|
| 単元のねらい | | 伝統文化の伝えるメッセージとはなにかを考えさせる。 | | | |
| 取り扱う伝統文化 | | 上総における凧づくり | | | |
| <p>単元の概要</p> <p>上総地方の伝統工芸の凧を地元（市原市）在住の「匠」から学ぶことにより，郷土に伝わる凧の制作の中で，伝統の技を学び，地域の文化・時代・風土をさらに理解し，郷土を愛する心をはぐくむ。</p> | | | | | |
| 単元の指導計画(全16時間) | | | | | |
| 時間 | 主な学習内容，学習活動等 | | | 教師の支援，取組体制(外部人材の活用等を含む)等 | |
| 1 | 凧の歴史や上総における凧づくり，制作方法について学習する。 | | | 上総に伝わる凧と全国の凧・千葉県におけるさまざまな伝統工芸をスライドを使い，講師紹介とともに興味関心を持たせる。 | |
| 1 | 龍を墨で描く。 | | | 龍の由来や龍のもつ意味を理解させる。 | |
| 6 | 上総袖凧個人作品の制作 紙を袖凧の大きさに切り，中央部に円を描く 骨の貼り付け 凧の下書き（墨で描く） 着色する 糸をつける 完成 | | | テーマとなる絵柄を理解し表現させる。 材料や用具の特性や生かし方制作方法など基礎的な技能を身につかせる。 | |
| 6 | 大凧の制作・7人程度のグループで角凧・袖凧を共同制作する。 凧の下絵を描く 骨の貼り付け 着色する 糸をつける 完成 | | | 凧に込められた思いを理解し長く受け継がれてきた素材や技に注目し，興味，関心を持って取り組ませる。 地元で伝わる2種類の凧の違いをより深く理解させる。 | |
| 2 | 凧揚げ 個人制作の凧と共同制作の凧を揚げる。 | | | 自然や生活と美術の関わりを感じ取り，凧をとおして伝統についての理解や見方を深めるさせる。 | |
| <p>本事例による成果と課題</p> <p>郷土に伝わる伝統文化やその歴史を理解し地域に対する関心が高まったこと，生徒が凧の制作をするなかで地域や保護者から多くの協力や助言を得ることができたこと，生徒の郷土に対する愛着心が高まったことの3点が成果としてあげられる。今後の課題としては，伝統的な絵柄をそのまま使い，凧づくりの体験・技術の修得といった面が強かったことがあり，生徒自身が伝統文化を生かしつつ 考え工夫し制作できるような教材の開発が必要である。</p> <p>日本の行事や模様には深い意味と，何らかのメッセージが存在する。話すことの苦手な日本人は，そのことを自覚し，次の世代に対するメッセージや会話の糸口となるものを自分の生活の道具や行事の中にもっていた。そのような日本の伝統文化を学び継承することにより生徒が次の時代とのつながりを認識することが出来たことが最大の成果である。</p> | | | | | |

上総風の制作

凧造りのきっかけ

美術の授業のなかで、「市原市と小湊鐵道を応援するポスター」をテーマに、ポスターの制作を行った。この制作の中で、市原の様々なよいところをインターネット等を利用して調べの中で、凧に関するところを見つけたのがきっかけである。この市原高校のある牛久に、凧の制作をする伝統工芸の職人が住んでおり、この市原は凧造りが盛んなところであることを知った。凧を作りたいそんな声が上がリ、この凧造りを実施することになった。



この2枚は、市長にあって、市役所に展示することになった。



市原の凧制作ととんび凧



孫の名前を祝いの凧によ
書いて糸ひく 上総凧
高くのぼれよ 大きく育て
祝いよろこぶ 初節句
(上総節句祝い歌から)

かつて、上総では男の子が生まれると、その子の健康と出世を祝って、端午の節句に凧を揚げるという風習があった。上総凧には『角凧』と『袖凧(長南トビともいう)』があり、海よりの一帯では『角凧』で山側では『袖凧』とその分布が分かれているという。また、一宮海岸地方と山の長南地方では微妙に違う。『袖凧』の歴史は、江戸時代の享和年間(1801~4)に長南町に住む表具師・大木忠蔵が、漁師の着る「万祝(まいわい)」を見てからとも、大工の印半纏をヒントを得て作ったのが始まりともされている。袖付きの着物のような独特な形であり、おおきなウナリをもつのが特徴である。

白地に赤の縁取り、中央に群青で子供の名前1文字または家紋を丸く書き入れ、五月の青空に映える鮮やかな色彩が基本である。また、金太郎などの絵を一面に配したものもある。

さて、この上総の凧は、江戸の時代の様子やこの地域のことを凧をとおしても知ることができる。江戸は角凧が、さかんであり、五井や姉ヶ崎といった東京湾ぞい、江戸の文化の影響を色濃く、受けていたと思われる。この牛久から船で東京湾に出ることもできたらしく、水路を利用した移動により、今よりもっと江戸に近い場所であったかもしれない。袖凧と角凧の、共存するこの市原は、大変おもしろい地域といえる。



高澤文雄さんについて

高澤さんの原点は、子供時代に遊び道具は全部自分で作り、その楽しさが忘れられなかったことにあります。

父親が農業の傍ら凧作りをしていたこともあって、迷わずこの世界へはいったことが、千葉県の実験の教科書にも、その様子が紹介されています。

上総角凧の制作を専門としている。上総凧は端午の節句に男児の健康と出世を願って揚げるもので、伝統の絵柄として足柄山の金太郎を描いた「熊金」「鯉金」

があります。上総角凧の金太郎の絵柄は、金太郎の全身が描かれた凧絵で全国的にも殆どみられないそうで、五井地区特有のものだそうです。鯉や龍といった絵も多く、節句に対しての思いが込められた絵柄のが特徴だそうです。高澤さんは、凧づくりの楽しみを一人でも多くの人に知ってもらいたいと、地元の小学校などで凧づくりの指導にも励んでいます。また、国内外での凧揚げ大会では、伝統工芸の披露と国際交流にも積極的に取り組んでいます。



常澄 富美夫さんについて



常澄さんは、残念なことにすでになくなられていた。牛久八坂神社大祭などでは、多く装飾を手がけ地元にとって無くてはならない人であったそうである。

自宅を訪ね多くの資料を奥さんに、見せて頂き、写真にとらせて頂いた。サーフボードくらいの大きさの凧などが大切にしまわれてあった。



万祝(まいわい)とは

発生と分布

万祝は、江戸時代の終わりに房総半島で生まれたといわれ、青森県から静岡県にかけての太平洋沿岸地域に広がった。今日では、文化8年(1811)の古文書が万祝の初見として知られているそうである。

用途

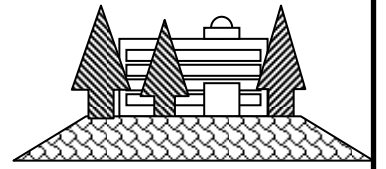
万祝は主に大漁時に船主や網主から関係者に配られた祝い着で、これを一同が揃いで着て神社仏閣に参拝したりしました。万祝を配る風習は、明治から大正期をピークにして昭和30年代から40年代頃まで続いた。

万祝の図柄

万祝は、裾(すそ)から腰にかけての部分に漁の様子や縁起の良い絵柄が鮮やかな色彩で描かれており、背の所には船主や網主の家紋や家印などが配されている。



市高とんび風 空にあがる



2年生の美術の授業の中で、地元につながる風の制作を行った。きっかけは、市原市が40周年を迎え市原や小湊鐵道を元気づけるようなポスターを授業で制作中、市原について調べるなかで、風に関する記事を見つけたのがきっかけである。市原市には千葉県伝統工芸の指定を受け、風の制作をしている2人の方がおり、一人は五井にすむ高澤文雄さん、もう一人はこの市原高校のある牛久に住む常澄富美夫さんであった。また、この市原は風制作が盛んなところであることを知った。「風を作ってみたい。」

そんな声が上がリ、この風制作を実施することにした。講師は、金太郎の絵柄の角風で大変有名な高澤文雄さんをお願いした。



さて、上総に伝わる風は、袖ヶ浦一帯は角風、長南・一宮は、袖風(とんび風ともいう)とその分布が分かっている。ここ牛久は、袖風(とんび風)がさかんであったことから授業の中では30cmの袖風の制作を行った。また大風制作のために、常澄富美夫さんの自宅を訪ね、奥さんに生前に制作した風や、多くの資料を見せていただいた。大風制作のための和紙もいただいた。2メートルのとんび風・角風の制作が始まった。角風は、もちろん金太郎の絵柄である。とんび風は、白地に赤の縁取り中央に金色と濃い藤色で校章を入れた。

とんび風・角風の制作が始まった。角風は、もちろん金太郎の絵柄である。とんび風は、白地に赤の縁取り中央に金色と濃い藤色で校章を入れた。



凧についての最後の授業になり、市高とんび凧を揚げた。午前中は、風があったが午後になり、風が段々弱くなった。麻糸をグラウンドいっぱい張った。準備している間に、さらに風が無くなっていった。大凧を3人で抑え、角度を合わせ、風がくるのを待った。合図とともに、引き手は全速力で走った。手袋に太い糸が食い込んでいた。揚がってくれと願う気持ちが強かったのか、糸を引く生徒の脚力が強かったのか、プロペラ機が上空を飛んでいるような音とともに凧は揚がった。うなりの音を初めて聞いた。

袖に塗られた朱赤が、光を通し空に映え、きれいだった。逆光になり指の間から見る凧は本物のとんびのようだった。数分間、上空をゆっくりと優雅に上空を舞い、そして無事？着陸した。



孫の名前を祝いの凧によ書いて糸ひく上総凧



高のほれよ
大きく育て
祝はよろこぶ初節句
(上総節句祝歌から)

いつの時代も、子や孫に対する思いは同じである。この凧を制作した生徒が、上総に伝わる凧とともに、次の世代にその思いも引き継いでいってほしい。

